

『信濃教育 第 1487 号 (平成 22 年 10 月号)』掲載

## 幼・保・小・中連携のあり方と生涯学習

～子どもの成長を連続的に捉える「学びのIn・About・For」～

木 村 吉 彦(上越教育大学大学院教授)

### はじめに

連携とは「同じ目的を持つ者が互いに連絡を取り、協力しあって物事を行うこと」であり、単なる「5歳児と小学1年生だけ、小学6年生と中学1年生だけの問題」ではない。幼児教育と小学校教育について、そして小学校教育と中学校教育についてそれぞれの教師がお互いをよく知り、理解し合うことが必要である。異校種間連携にとってのキーワードは、「相互理解」と「互恵性」(お互いにメリットが見いだせる活動。具体的には交流授業など)である。

私たちは、子どもを「連続的に」学び、育ち、成長する者であるとして捉えることがまずもって重要である。「自分の目の前にいる、子どもの今の姿」のみにとらわれて、「これまで」と「これから」、さらには「子どもが抱える多様性(場によって見せる姿が異なること)」を忘れがちになる教育活動の日常を、私たちは見直さなければならない。また、子どもを学習の主体者として形成することこそが教育の本質である、という認識に立つことが肝要である。従って、「子ども理解」をないがしろにしては、およそ「教育」や「学習」は成り立たないのだ、ということを最初に確認しておきたい。

これまで私が提唱してきた「学びのIn・About・For」は、子どもの育ちを全人的かつ連続的に捉える際の有力なヒントである。この考え方は、活動や体験を通して子どもをトータルに(全人的に)育てようとする幼児教育・生活科・総合的な学習を念頭に置いた発想であることをはじめに断っておく。子どもの成長を連続的・全人的に捉える「学びのIn・About・For」理論を検討することで、幼児期から児童期・中学校生徒期について見通しを持って教育することの意義が、生涯学習論も含めて見えてくる。

### ・学習の流れの象徴としての「In・About・For」

まず、「In・About・For」の語源とその意味するところを示す。「In・About・For」は、もと

もとイギリスの環境教育の用語である。

1. Inとは: In とは、学習対象となる場所そのもの(例えば森や川)に入り込むことによって、その場所がどういうものであるかを体と諸感覚の全てを使って満喫し、学習対象を体感・体得できるような体験に没頭・集中する活動を象徴している。学習対象であるその場にたっぷり浸りきる中で、In の活動では、活動への集中力や感性的な課題発見力の育ちが期待できる。

2. Aboutとは: About は、In の活動の中で見付けた感性的な課題についてこだわりをもち、その疑問(「どうして所々樹木が枯れてるの?」「どうして、川の上流にゴミがあるの?」)について解決しようと、さまざまな調べ学習に取り組む活動を象徴している。ここでは、知的な課題発見力(酸性雨・ゴミ問題)と課題を解決するための情報を集める力の育ちが期待できる。この情報収集力とは、「考える材料を集める力」を意味する。

3. Forとは: For の活動とは、体験や活動を通して得た実感の伴った問題意識に裏付けられ、調べ学習によって自分で集めた情報(考える材料)を駆使して、学習対象に対して自分はどういう貢献ができるかを考える活動の象徴である。例えば、「森のために僕は何ができるだろうか、川をきれいにするために私は何をすべきなのだろうか」などと考えを進めることである。この For の活動は、考えを深め自分で得た結論に基づいてどのような行動をとるか、どのように自分の考えを伝えようかといった「行動力」や「自己表現力」にまでつながっていく。

#### 4. 活動や体験に基づく探究的・主体的な学習

以上のように、「体験や活動をする・課題を見付ける<「かかわる・みつける」>(In) こだわりを持つ・情報を集める<「こだわる・しらべる」>(About) 何ができるか考える・判断し行動する<広義の自己表現><「考える・表現する」>(For)」という、体験や活動を通して行われる一連の学習の流れを象徴するものとして「In・About・For」がある。ここで大切なことは、感性的な課題発見力・知的な課題発見力・情報収集力など、自分で見付けた課題に対してこだわり、様々な方法を駆使して情報を得ようとする意欲が根底にあって初めて、考えるという活動が成り立ち、様々な問題について解決する力が育つということである。活動や体験の中での主体的な課題設定があつてこそ、探究的な学習が成り立つのである。これは、現在の我が国の学校教育の最大の課題である「生きる力(いかに変化の激しい時代にあつても、主体的に自分の人生を生き抜くことのできる力)」育成の切り札となりうる学習過程である。

・子どもの育ちを連続的に見取り、全人教育につなげるための「In・About・For」

一方、私は、この「In・About・For」を、子どもの発達段階に見合った、その時期に最も大切にしなければならない活動内容とその発達段階に応じて育てたい資質・能力を象徴するものとしても考えている。幼児期から中学校卒業までを視野に入れ、それぞれの時期に最も大切にしたい活動とそこで育まれる資質・能力を表にしたものを、次に載せる。ここには、子どもの学びや育ちを連続的かつ全人的に捉え、目の前の自分が直接受け持っている子どもだけでなく、子どもたちのこれまでとこれからを強く意識し、見通しをもって子どもの教育に当たることの大切さをも示唆している。

保育（遊び）	生活科	総合的な学習	
<p>For（～のために） 誰のために 何のために</p> <p>About こだわる</p> <p>In （～の中へ） 没頭する・夢中になる ＜自己中心性・直接 ・集中力＞</p>	<p>（～について） ・調べる・知る ＜知的好奇心・ ・こだ る・ 浸る 経験・体験を通した ・主体性の育成＞</p>	<p>追究の うとする 調べ方・学び方＞ 追究の第一段階 わりを見つける力 ・情報収集力 学習＞</p>	<p>＜他者意識＞ ＜自己の生き方＞ 第二段階・思考力 ・表現力・実行力</p>
<p>幼 児 期（３歳～） ＝「知性の土台」作り</p>	<p>低 学 年 「わたしは が好きです、得意です。」</p>	<p>中 学 年 「わたしは～について知っています」</p>	<p>高学年・中学生 「わたしは についてこう考えます」</p>
<p>児 童・生 徒 期 生涯学習論にも応用可</p>			

幼児期から中学生期までを視野に入れた「学びのIn・About・For」

それぞれの時期の特徴と In・About・For のかわり方は以下の通りである。

#### 1. 幼児期から低学年期

この時期の自己中心性とは、自分にとって身近なものについてはよく学ぶ（よく覚える・よ

く身に付ける」という特徴をもっている。従って、自分の好きな遊びや自ら選んだ活動に「没頭する体験」が重要である。この体験が集中力を生み、人間としての主体性の源を創る。また、この時期の諸感覚をフルに使った活動が感覚（感性）的な課題発見力を育てる。幼児や低学年であっても、遊びの対象や遊び相手へのこだわりはあるし、年長児にもなれば、「年少児のために何ができるか」（リーダー意識）をもつので、In を中心としながらも、About・For も意識した保育や学習が必要である。とりわけこの時期に育つ集中力は「ぼくは～が大好きです」「わたしは～が得意です」などと、自信を持って自分を前面に出す力（主体的に生きる力）に結びつく。これが、生活科の教科目標である「自立（独り立ち）への基礎」であり、主体的に生きる人生のスタートラインであることを示している。

## 2. 小学校中学年期

この時期は、知的好奇心が旺盛になる時期である。また、7歳をその芽生えの時期であるとする「抽象的な思考力」も育っている。従ってこの時期の児童は、自分で興味・関心の対象や課題が発見でき、こだわりを見つけることができる。そこで、この時期の子どもたちに対しては、自分のこだわりに基づいた「調べ学習」を設定する必要がある。この時期の子どもたちは、「おもしろそうだから調べよう」「興味があるから知りたい」と考える時期である。ただし、ここで全員に「社会的な課題」レベルを要求するのは、個人差はあるものの少し無理があると思われる。表の中の「追究の第一段階」とは、必ずしも社会問題へ直結しなくとも自分の興味・関心を大事にした追究でもよい、という意味である。とにかく、調べ学習（本やインターネット）や情報収集の体験（インタビューなどの取材体験）を多くもつことで、「考える材料集めの力＝情報収集力」を養いたい時期である。この情報収集力が次のForの活動に直結する。

## 3. 小学校高学年・中学生期

私は、For（～のために）の思考の中に二つの種類の思考力を見出している。一つは、「誰のために」という他者意識（相手意識）のある思考である。この他者意識のある思考を促すことで社会的な問題意識（地球環境のために・高齢者のために・ゴミ問題のために等）に裏付けられた学習が可能になる。これが「追究の第二段階」である。

もう一つは、「何のために」という自分のやっている活動や学習の意味を問う思考である。これは、「誰のために」も含めて、自己の生き方について考える力につながる。言うまでもなく、この考える力は総合的な学習の究極のねらいとなる思考力である。

さらに言えば、私は、小学校高学年や中学生の総合的な学習においては、考えたことをもとにした判断力（「酸性雨を食い止めるために僕は二酸化炭素を極力出さないようにする」「自分

自身もゴミの分別と回収方法をしっかり守る」) や、行動力<広い意味の自己表現力と考えてよい> (「近くに移動する時は自転車を使う」「ゴミの不法投棄を防ぐための看板を立てる」) といった、日常生活に直結する資質・能力も養うように努めなければならないと考えている。このように、自我の発達がある程度のレベルにまで達したと考えられる小学校高学年以降では「thinking for ~」から派生して、「judge」と「do」の力まで育てたい。このことは、思考力というものがそれだけで意味を成すものではなく、自分の生活行動にまで結びついて初めて意味を成すものであることを示している。これが、活動や体験を通して学習対象とかかわり、思考力を育み、全人的な育ちにまで達することの究極的な意味だと思われる。

小学校高学年や中学生における実際の学習活動においては、調べ活動をはじめに行い、ある程度の基礎知識を得た上で活動(体験)に入ることが多い。これも、発達段階を見据えた学習のあり方として認められてよいであろう。ただし、高学年・中学生の学習において About・For を中心に置いたとしても、やはり幼児期・低学年期の部分で述べたように、In の活動を大事にして確保する必要がある。頭でっかちの学習だけでは、実生活に根ざした探究的な学習(PISA 型学力の育成)は期待できないからである。

以上から、学習の流れにおいても、発達段階に即した学習においても、In の学び(活動や体験)があって初めて、課題発見と課題解決への意欲がわき、About・For の学びにつながっていくのだと言える。「知性の土台」とは、全人的な人間形成の土台をも意味している。

### ・生涯学習における「In・About・For」と「生きる力」

これまで述べてきたように、この「**学びの In・About・For**」理論は、児童期にとどまらず、私たち人間が生涯学び続けるに当たって求められる資質能力の育成とそれを実現するための活動との関連を示唆している(生涯学習論への応用)。すなわち、実生活上の体験や活動及び経験(体験したことの意味付け・価値付けた結果)を通して、自分自身の課題を見極め、必要な情報を集めた上で考え、判断・決断し、行動に移したり他者に向かって意志を表明するという一連の日常生活の流れを「In・About・For」は示してくれているのである。とりわけ、実体験(In)に基づかないと本質的な問題解決には至らないという現実がある。この実体験を通して自分自身にとっての問題把握を十分に行うことが成人後の私たちに求められている。その上で、他者意識と自我意識との両方を踏まえた問題解決にまで到達することが今の私たち日本人に必要とされる国際学力の本質的内容である。従って、自分にとって身近な日常の中で見出した課

題に主体的に対処する力こそが、我々の人生を決める「生きる力」である。

< 参考文献 >

上越市立大町小学校編著『思考力をはぐくむ授業～構想と展開のポイント～』（日本文教出版、2008）

高階玲治編集『幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開』（教育開発研究所、2009）